

令和5年度 政務調査研究報告書

| | | | |
|----------------------------|--|---------|--|
| 会派名 | 会派みらい | 支出伝票No. | |
| 事業名 | 先進地視察事業 「ふらの演劇工房」の概要と「演劇を通じた人と人の繋がり」について（北海道富良野市） | | |
| 事業区分 <small>（該当へ○）</small> | ①調査研究費 ②研修費 ③広報費 ④広聴費 ⑤陳情等活動費 ⑥会議費 ⑦資料作成費 ⑧資料購入費 ⑨人件費 ⑩事務所費 | | |

(1)この事業の目的：どんな課題を解決するため あるいは誰・何を対象に何を意図するのか

新飯田文化会館の建設に向けた検討が進むなか、演じる側、観る側の双方に配慮して建設され、特徴的な運営の劇場（富良野演劇工場）の建設、運営（ふらの演劇工房）の理念を探り、新飯田文化会館の在り方を考える。

(2)実施概要

| 調査・研修の場合の 実施日時と 訪問先・主催者 | 日時 | 訪問先・主催者等 |
|-------------------------------|----------------------------|-----------------------------------|
| | 令和5年7月25日 9時30分～ 11時30分 | 北海道 富良野市 「ふらの演劇工房」 & 「富良野演劇工場」 |

| | |
|-------------|--|
| 視察内容・実施したこと | <p>1 視察先の概要 「ふらの演劇工房」は、森の中の劇場「富良野演劇工場」を拠点として20年にわたり活動するNPO法人。</p> <p>2. 視察内容 出席者：富良野演劇工場 工場長、NPO法人ふらの演劇工房 事務局長 大田竜介 氏</p> <p>3. 懇談内容 A. 概要説明 ○「富良野演劇工場」とは 富良野市が建設し「ふらの演劇工房」が管理・運営する、全国初の公設民営劇場として、2000年10月にオープン。ふらの演劇工房はNPO法人（特定非営利活動法人）で、活動はボランティアの人達で支えられている。 設計の段階から作家・倉本聰氏やプロの照明家・音響家・俳優などが参加し、創り手から見た理想を具現化した「創り手のための劇場」。 『「多目的」は限りなく「無目的」に近づく』という倉本氏のアドバイスから、演劇創作の機能に特化。 客席（302席）より舞台スペースを広く取り、大道具製作室（ワークショップ）・衣装室・リハーサル室・グリーンルーム（出演者・スタッフのサロン）など、創り手にとって必要な設備を備え、アーティストの想像力をフルに発揮できる環境が整えられている。</p> <p>○「富良野演劇工場」のコンセプト</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 「演劇ソフトの生産工場」として、その機能性を活かした良質で個性的な演劇文化の創造と発信活動を行い、「大いなる感動を生み出すための活動拠点」とする。 2. 民間ボランティアによる柔軟で独創的な運営をはかり、すべての人々に愛され活用される「市民文化の活動拠点」とする。 3. 様々な人々との交流を通して未来へのエネルギーが創出される「人づくり・まちづくりの活動とする。 |
|-------------|--|

○「ふらの演劇工房」とは

全国認証第一号の特定非営利活動（NPO）法人。

「富良野を演劇のまちにしたい！」

演劇を通じた心豊かなまちづくりを目指し、森の中の劇場「富良野演劇工場」を拠点に活動し、20年目を迎える。

活動を支えているのは、約100名のボランティアスタッフ。公演時の駐車場整理、受付、喫茶、売店、場内整理、出演者・スタッフの食事作りなど、すべてボランティアで行っている。単なる観客としてではなく、少しでも公演に関わり、アーティストと触れ合うことで、携わるすべての人たちがより一体感を持つことのできる事業を展開している。

作家・倉本聰氏が富良野で創作活動を始め、俳優と脚本家の養成機関『富良野塾』を設立したのが1984年。それ以降、このまちには芝居を観たり、携わることに感動する喜びが広がってきている。

○「ふらの演劇工房」会員

□会員の種類

1. 正会員 年会費10,000円 総会の議決権あり。NPO法人としての趣旨を理解し、主体的積極的に活動して下さる個人が対象。
2. 友の会会員 年会費3,000円 総会の議決権なし。ふらの演劇工房のサポーターとして、応援して下さる個人が対象。
3. 法人会員 年会費10,000円 総会の議決権あり。NPO法人としての趣旨を理解し、主体的積極的に活動して下さる法人が対象。

□会員の期間

申込時から翌年6月末まで

□会員特典

1. 会報の郵送
2. チケットの優先予約
3. 工場内喫茶のコーヒー券又はソフトドリンク券の無料配布（正会員・法人会員10枚／友の会会員5枚）
4. 演劇工場で取り扱う公演（一部対象外）に関して、会員割引500円
5. オリジナルグッズ・プレゼント

1)「富良野演劇工場」劇場建設の経緯

劇場は、20年前に富良野市が建設。普通の文化会館とは異なる。作家の倉本聰氏が、富良野市の移住計画である「文化人の避暑地」で富良野市に移住し、「北の国から」などで脚本家として成功する中で、建設に関わった。その後、富良野市は「ドラマの生まれるまち」と言われる。

倉本聰氏は、「日本には、アイドルは生まれるが本物の脚本家と俳優が育たない」と言って、脚本家と俳優を育てる「富良野塾」を作った。授業料は無料。塾生はアルバイトで収入を得る。この活動のなかから、富良野に良い劇場をつくらう、との声が上がリ、劇場は既存の文化会館と競合するのではなく、との反対意見もあるなか、劇場建設の推進を公約とする市長を誕生させて森の中の劇場が実現した。

| | |
|---|--|
| 視 察 内 容 ・ 実 施 し た こ と | <p>2) 劇場の建設にあたって、大切にしたい点</p> <p>①建設までは一生懸命やるが、建設後に劇場に関わることができるか。市民がどう活用できるかの「生産工場」を造りたい。</p> <p>②多目的ホールは限りなく“無目的”になる。アーティスト(演じる側)のスペースは狭いなどになるので、演じる人のためにありたい。結果として市民のためになる。</p> <p>富良野演劇工場は、森の中の演劇専用のホール。富良野市には、市街地に芸術文化に特化したホールもある。その街の特徴を生かしたものでありたい。</p> <p>③ホールに鑑賞用の「親子の部屋」を設置した。</p> <p>④客席前の席の人が邪魔にならないように急傾斜とし、席は、座った時に人のサイズに合うベンチシートにした。客席中央部を取り外すと、下部の楽屋からステージまでの花道となる。</p> <p>⑤セリフが聞こえるデッドな壁</p> <p>⑥ステージは27m×23m。合板を敷き自由に加工ができる。美術バトン27本。</p> <p>⑦役者がリフレッシュできる空間として「グリーンルーム」を設置。</p> <p>⑧楽屋は、客席下部にあり、個室と大部屋が2つずつのほか、廊下にも化粧前があり、40名以上が楽に利用できる。シャワールームも2つ完備。</p> <p>3) その他</p> <ul style="list-style-type: none"> ・小学校の学芸会に演劇工房から指導に出向き、優れた作品が出来上がる。これを劇場で発表。当日は保護者を含めて満席。これを21年間やっている。 ・富良野高校では、単位制で演劇が選択できる。表現力とコミュニケーションを養うプログラムで、生徒たちは創造性を育てている。 ・地元企業の社員研修にも協力。 ・「演劇によるまちづくり」をゆるぎないものにするために、「富良野市文化芸術基本条例」を制定し、富良野市が文化芸術を推進していくための基本的な考え方、理念を定めた。 |
| 感想 (まとめ) ・市に 活か せる こと 等 | <ul style="list-style-type: none"> ・演劇に特化した劇場として、その成り立ち、施設・設備は、富良野独自のものである。 ・「演じる人のため」は、「観る人(市民)のためになる」は、富良野に限らず、劇場・ホールの建設(設計)にあたって重要なコンセプトである。 ・「工場」(劇場)の運営を担う「工房」(NPO法人)の組織、運営方法は、指定管理者としての位置付けではあるが、劇場・ホールを建設後にいかに活用していくかとの視点では、“市民が支える文化施設”の在り方として、大いに参考になる。 ・「工場」の建設場所は、市街地に建設されている文化会館のこともあって、森の中の自然環境に囲まれた良いロケーションであり、芸術の創造においては最適な場所であると判断できるが、文化施設、なかんずく芸術の鑑賞の場となると、まちづくりや街のにぎわいと不可分性が考慮されることが必要である。 |

(3) この事業実施後の対応及び方向性

| |
|---|
| <ul style="list-style-type: none"> ・これを参考とし、今後教育委員会から示される「新飯田文化会館検討委員会」の報告を会派として研究する資料とする。 ・会派として調査継続中。 |
|---|

令和5年度 政務調査研究報告書

(様式C)

| | | | |
|-------------|--|---------|--|
| 会派名 | 会派みらい | 支出伝票No. | |
| 事業名 | 先進地視察事業 「人口増加に転じた攻める政策の実践」について（北海道東川町） | | |
| 事業区分 (該当へ○) | ①調査研究費 ②研修費 ③広報費 ④広聴費 ⑤陳情等活動費 ⑥会議費 ⑦資料作成費 ⑧資料購入費 ⑨人件費 ⑩事務所費 | | |

(1)この事業の目的：どんな課題を解決するため あるいは誰・何を対象に何を意図するのか

北海道の東川町は、ユニークな施策を打ち出して移住先として人気を集め、人口を増やし続けている。人口減少が叫ばれる中、飯田市も移住定住に力を入れ、リニア中央新幹線の長野県駅が設置される自治体として大きく変わろうとしている。このため、地域の資源（自然、人、文化）を大切にしまちづくりを進める東川町から、ありきたりでない発想から生まれるまちづくりを学び、飯田市のこれからは生かしたい。

(2)実施概要

| 調査・研修の場合の実施 | 日時 | 訪問先・主催者等 |
|----------------|-----------------------------------|-----------|
| 日時と 訪問先・主催者 | 令和 5年 7月 24日 13時 00分 ～ 15時 00分 | 訪問先：東川町役場 |

| | |
|-------------|---|
| 報告内容・実施したこと | <p>1 視察先（市町村等）の概要</p> <ul style="list-style-type: none"> 東川町の人口は約8600人。日本最大の自然公園「大雪山国立公園」の最高峰「旭岳」の麓に位置する。立地は、北海道のほぼ中央。 大雪山が生み出す水資源の恩恵に預かり、町内の全戸が地下水で生活。このため、上水道と上水道施設がない。 1985年に「写真の町」を宣言し、「自然」「人」「文化」を大切に「写真映りのよいまち」を進め、2014年には「写真文化首都」を宣言。1994年からは「写真甲子園」も主催する。 ブランド米「東川米」の産地。 「旭川家具」の3割を生産する。 25年間人口が増え続け、移住先として人気を集める。 |
| | <p>2 視察内容</p> <ul style="list-style-type: none"> 人口増加の成功への取組み ブランディング事業の取組み 移住定住の促進策 |

【まとめ】

■① 人口の割には課が多い役場

- ・東川町役場の職員は120人。課は18。
- ・写真のまち課、文化交流課、東川スタイル課(5月1日に経済振興課に統合)などがある。
- ・1つの課で完結するのではなく、ほかの課とどう連携するかと、職員たちは意識している。
- ・「写真甲子園」ではほかの課も準備・運営を応援し、全庁あげて取り組んでいる。
- ・町税は9億円。ふるさと納税はこれを上回る。

■② 30年間で人口が約2割増加した移住への取り組み

- ・2015年に、40年ぶりに人口8000人を回復。現在、人口の半分は移住者が占める。
- ・「東川風住宅設計指針」に基づき、壁の色や庭の植栽、木材の利用、屋根の形、外壁の色といった指針に賛同した人に家を建ててもらおう。これにより、町と住民は景観協定を締結。木製のカーポートには補助金を出す。住宅内の敷地は、住民が共同で管理する。
- ・「お試し移住」の準備、都内でのイベント、起業家支援事業など、飯田市と同様の取り組みもある。
- ・④で詳述した「天然水」を使った暮らしに魅力を感じた移住が多い。旭川市のベッドタウンとしての位置づけもある。

■③ 写真文化首都「写真の町」

※目的

↓

写真を通して景観に配慮したまちづくりができる。

写真映りの良い「まち」づくり

写真映りの良い「人」づくり

写真映りの良い「もの」づくり

- ・1985年の「写真の町」を宣言以降、「国際写真フェスティバル」を毎年夏に開催。国内外から写真作家や関係者を招き、写真に関するイベントを行っている。
- ・1989年には、写真文化の発信を担う施設として「東川町文化ギャラリー」をオープン。2021年には、大規模改修と増築を経てリニューアルオープンさせた。
- ・「写真甲子園(全国高等学校写真選手権大会)」を1994年から実施。全国から予選を勝ち抜いた優秀校18校が東川町に集い、同町の住民も被写体になりながら、同町での撮影を通して熱戦が繰り広げられている。
- ・2014年には「写真文化首都宣言」を行った。

■④ 「天然水」を生活水に

- ・東川町では、各家庭がポンプアップすれば天然の地下水を日常で使うことができる。この天然水は「大雪旭岳源泉」で、環境省選定「平成の名水百選」。このため、東川町には上水道がない。
- ・下水に関しては、旭川市の処理場を利用させてもらっている(負担金を毎月支払っている)。
- ・毎月の費用は下水道代のみ。
- ・新築から3年以上で井戸の水が少なくなったり、水質が悪くなった場合には、総工事費(ボーリング代と配管)に対し半分の補助が町から出る。

■⑤ 豊かな水資源を活用した飲食店とカフェ

- ・天然水を生かしたコーヒーが飲める店や、町の景観にマッチした飲食店が点在。東川町にはカフェが70店ある。

■⑥ 北海道屈指の米どころ

- ・大雪山系のミネラル豊富な天然水(地下水)で行う米作りを行い、「東川米」のブランドを確立。日本穀物検定協会が実施する米の食味ランキングでは、最高ランクの「特A」を2011年以来、連続で獲得している。
- ・こうした米と水を求め、飲食店を構える目的で移住する人も多い。
- ・耕作放棄地はゼロ。Uターンをして米作りに取組む人もいる。
- ・JAと協力し、酒米の生産にも着手。2020年には、公設民営の酒蔵を誕生させた。

■⑦ 旭川家具

- ・「日本五大家具産地」の一つ。北海道の良質な木材を使い、優れたデザインで知られている。東川町では、旭川家具の約30%を生産している。
- ・中学校で3年間使った自分の椅子を卒業時に持ち帰るプロジェクトも実施。家具の事業者支援も含め、家具を身近に感じてもらう取り組みも行っている。

■⑧ 盛んな海外交流と多文化共生

- ・国内唯一の、公立の日本語学校「東川町立東川日本語学校」は、2015年に創立。アジアを中心に世界中から留学生を受け入れている。
- ・「東川町立東川日本語学校」の予算は4億円。「ちょっとした観光客を受け入れる感覚」で、留学生たちの町での飲食などで8億円の経済効果がある。
- ・空き教室を活用した、短期の日本語研修事業にも2009年から着手。
- ・東川町と民間の専門学校、近隣の市町村が連携し、外国人介護福祉人材を養成する取組も進めている。
- ・「写真文化首都」として、2015年から写真文化を通した「高校生国際交流写真フェスティバル」を開催。2019年には、22国からの参加があった。
- ・東川町役場でも国際交流があり、令和5年4月現在で17カ国の18人が職員として働いている。

■⑨ 「写真の町」ひがしかわ株主制度

- ・「納税者=株主」「寄付=投資」として、東川町のファンを増やす取組み。
- ・関係人口の創出にもつなげる。
- ・手ごたえは大きく、株主総会に欠かさず来る人もいる。
- ・「ふるさと納税」として、税法上の控除が受けられる。

【明らかになったこと】

■写真について

- ・「写真を通したまちづくり」をスタートさせた町長から数え、現在の菊地伸町長は4人目。2人目の町長の時は、「写真を通したまちづくりの廃止」を公約に当選したが、いろいろな繋がりが出てきて廃止できなかった。今の議長も反対の立場だったが、「今では違和感はなくなった」。
- ・「長く続いたことで、関係人口づくりのベースになった。『写真甲子園』で写真を撮られることに、住民に抵抗感もなくなった。継続は力だ」(菊地町長)。

■移住について

- ・バブルの崩壊を機に旭川市が宅地開発をしなくなり、東川町で宅地開発を手がけたところ、人口が増えたのが最初の動き。
- ・この6年間で移住者が増え、地元住民との摩擦もあった。しかし、移住者が半分以上になった今、地元民が片意地貼っていても肩身が狭くなる。以前よりも、移住者がいることが当たり前になってきた。
- ・「特に、移住をお願いしていない。住みやすいまちづくりは進めてきた。移住が増えたのはその結果」(菊地町長)。町の職員自身も「東川町は暮らしやすい。この町のファン」だと言う。「そうでなければ、都会で移住の説明はできない」とも。
- ・移住の説明会では、「町内会には必ず入ってもらおう。入りたくないのなら、東川町は合わない」とはっきり伝えている。
- ・例えば、200戸の町内で、町内会への加入率は90%以上。
- ・母子家庭、抵所得者の移住が多い。
- ・東川町に移住すると、すぐに仕事が見つかる。「旭川家具」の仕事で働くケースが多く、昼間の人口が100人ほど多くなる。
- ・「定住人口をキープするには、いろいろな事業を展開することが大切。前松尾町長は、国の交付金を有利に使うために、スピード感をもって20年やってきた実績があるが、町民の間では『東川町はこれからどこへ行くのか』と不安も生じているが、自分はこれまでのスタンスを変えるつもりはない。積み重ねてきた実績を町民に説明していく」(菊地町長)。

■平成の大合併で「自立」を選択

- ・2003年の町長選で、「自立」を公約にした前松岡市郎町長が当選。職員と議員からは「合併しないとダメ」という声はほとんどなかった。旭川市も札幌市も、合併に旗を振らなかった。

↓

「合併は国の事情。現在の北海道の歴史は浅く、開拓精神が旺盛で、『なぜ合併をしなければいけないのか』という雰囲気があった」(菊地町長)。

■現町長の公共施設への考え方

「公共施設は、全てが金くい虫ではない。利益を生む施設もある。住民福祉のために、将来のために負担する財源も必要。企業との関係づくりで外からお金を集め、財源に回す」。

【雑感】

- ・「攻める政策が多い」と説明があったが、まさしくそうした印象を受けた。「移住をお願いしていない」と菊地町長が強気な発言をしても、さまざまな施策にきちんと取り組んでいる。柔軟な発想ができる職員は、町の財産だ。

感想(まとめ)・市に活かせる点等

- ・飯田市は「公共施設マネジメント」で施設の縮小に取り組んでいるが、東川町ではひと昔前のように、大きな施設を複数オープンさせているため、この違いを質問したところ、町長と議長、副議長の顔色が変わった。議会側はこうした動きにストップをかけようとしているが、町長が押し切っている印象を受けた。臨時議会が多いのも、こうしたことが背景にあるようだ。それだけ、東川町の執行機関側はエネルギーギッシュだった。
- ・写真文化が町に浸透し、町民は今では誇りに感じている。「そんなもん」と言われてきた写真文化をあきらめず、めげずに取り組んできた成果が表れている。
- ・「天然水」を生活水として利用する取組みを真似できる自治体は、そうはない。東川町は、こうした環境にも恵まれている。
- ・「合併は国の事情」と言い切る菊地町長。開拓精神が旺盛な土地柄が、そう言わせるのだろうか。東川町は、実際に合併をせず、自立して輝いている。

(3) この事業実施後の対応及び方向性

- ・会派として調査継続中。

令和5年度 政務調査研究報告書

(様式C)

| | | | |
|--------------------|--|----------------|--|
| 会派名 | 会派みらい | 支出伝票No. | |
| 事業名 | 北海道上士幌町 「MY MICHI」プロジェクトについて | | |
| 事業区分 (該当へ〇) | ①調査研究費 ②研修費 ③広報費 ④広聴費 ⑤陳情等活動費 ⑥会議費 ⑦資料作成費 ⑧資料購入費 ⑨人件費 ⑩事務所費 | | |

(1)この事業の目的：どんな課題を解決するため あるいは誰・何を対象に何を意図するのか

地域資源を生かした関係人口づくりの1つの方策として、地域の農産業を通じた「人との出会い」「人との関わり」による関係性をつなぐ新しい取り組みを学ぶ。
 地域外の若者と町民をどのようにつなげ、お互いを生かし合う仕組みをどう構築してきたのかを学ぶ。

(2)実施概要

| 調査・研修の場合の 実施日時と 訪問先・主催者 | 日時 | 訪問先・主催者等 |
|-------------------------------|---------------------------|--|
| | 令和5年7月26日 9時30分～11時30分 | 株式会社マイミチ 代表取締役 西村剛 氏 株式会社生涯活躍のまち かみしほろ 事業統括 平岡崇志 氏 上士幌町企画課財政課 企画・地域振興担当 主査 遠藤 祐司 氏 |

| | |
|--------------------|---|
| 報告内容・実施したこと | <p>1 視察先(市町村等)の概要 上士幌町は北海道十勝地方の北部、日本一広い国立公園である大雪山国立公園の東山麓に位置し、町内の約76%が森林地帯。基幹産業は畑作、酪農、林業など。特に、乳牛の飼育頭数は全国トップクラスで、乳牛・肉牛を合わせると人口の6.8倍、34,000頭以上が育てられている。面積は飯田市と同等の695.87km²で人口は5,229人。</p> <p>2 視察内容 [MY MICHI プロジェクトとは] 2020年度からスタート。道内外の若者が町内滞在を通じて自らの悩みや進路に向き合うことを通じ、自分探しをサポートする事業。対象は自分の生かし方を探す20～30歳代の若者たち。体験期間は1か月から3か月程度で滞在中は参加者が合宿で共同生活をし、農業や観光事業などで働くことで町の人と関わりながら、「遊ぶ・学ぶ・働く」ことを通じて、自分自身の仕事や生き方に対する考えや姿勢を見つめる「大人の体験留学」。</p> [プロジェクトの目的] マイミチはそもそも町内に不足している若者人材を補うことを目的としており、関係人口策として取り入れられた。 参加者とまちの人たちがマイミチのプロジェクトを通して融合することで、若者は自分の可能性を発見し、まちの人たちも自分たちの提供したもので若者たちが成長する姿をみて新しい発見をするという、お互いの可能性を引き出し合う本当の生かし合いができる。⇒深い関係人口づくり <p>地域資源の中でも観光商材・地下資源など目に見えるものはみな企業がお金にするが、人という地域資源に関してはの取り組みはまだ未開拓。しかし地元の人間だけでは難しいので、外部からの人を入れてお互いが生かし合うことが狙い。</p> |
|--------------------|---|

お話を聞き始めて真っ先に思ったのは「飯田市の農家民泊と似てるな」ということ。飯田市の農家民泊は修学旅行生の農業実習がメインだが、20～30歳代の大人を対象にした「癒やし・自分探し」のコンテンツとして展開させていける可能性があると感じた。

西村さんの言葉。「ゴールを移住定住・起業にしない。そうすると思惑が勝ちすぎてしまう」というように、深い関係人口をつくることが大切で、移住定住はその結果であるという考え方は大切だと思った。

参加者の体験談。「上士幌の人たちにお世話になった。だから上士幌に恩返しがしたいと思う」という言葉は、関係人口づくりの本質を表現していると思う。

(3) この事業実施後の対応及び方向性

- ・会派として調査継続中。

